

2025

41

2026年41号（1月発行） 発行責任者 柴崎 跡也



北海道医療センターニュース YAMANOTE



新しい一年が、皆様にとって 健やかで希望に満ちたものとなりますように。

北海道医療センター広報委員会

TAKEFREE

目次

院長 年頭のご挨拶

ベストポスター賞受賞！

国立病院総合医学会
in金沢

市民向けがん公開講座

専門医が伝える「5大がん検診」

院内研修について

院内暴力訓練を終えて

年頭のご挨拶



院長 伊東 学

新年明けましておめでとうございます。2026年の年頭にあたり病院を代表してご挨拶申し上げます。多くの皆様が新たな抱負や目標を胸に、新しい気持ちで日々をスタートされたことと拝察いたします。昨年を振り返りますと、どの医療機関も同様かと存じますが、当院においても大変厳しい経営状況の中、さまざまな対策に取り組んだ一年でした。10月には地域包括ケア病棟を一棟休棟し、病床数を643床から598床へと見直すことで、経営の効率化を図りました。セーフティネットとしての医療基盤を維持しながら、三次救急を含む急性期医療、難病医療、認知症医療など各領域の専門性を保ちつつ、効率的な運営方法を模索する時期でもありました。地域の皆様、患者様、そして職員のご協力により10月決算では単月ではありますが経常収支の黒字化を達成することができました。しかしながら、依然として経営基盤は厳しい状況が続いており、より多くの皆様に安心してご利用いただける地域の基幹病院として機能強化が必要であると考えております。

昨年末には職員表彰を行い、病院運営、学術、教育など18分野で著しい功績を挙げた診療科・部門・個人を表彰いたしました。受賞された皆様に心より敬意と感謝を申し上げます。第79回国立病院総合医学会では4題がベスト口演賞、ベストポスター賞を受賞し、また附属看護学校は令和7年度厚労省「看護師養成所におけるDX効果検証事業」への参加機会をいたたくなど、大変栄誉ある出来事もありました。医療安全面では、高齢者の誤嚥・窒息への対策を継続し、窒息事故ゼロ1000日を達成いたしました。また、病気の子どもさんや付き添いのご家族のために、病児食・付き添い食の導入も行いました。社会的課題となっている情報セキュリティ対策や医療現場の保安体制についても、各部署が連携しながら取り組んだ一年でした。市民の皆様から寄せられた貴重なご意見をもとに、各部門が自主的に改善を進めてくれたことにも深く感謝いたします。

本年の干支は「午（うま）」、そして60年に一度の「丙午（ひのえうま）」の年です。暦の上では情熱が高まり、大きな飛躍が期待できる年とされています。これまで培ってきた力を医療にしっかりと結びつけ、札幌西地区をはじめ北海道全域の皆様に、安心と安全の一年をお届けできるよう、職員一同さらに精進してまいります。本年も変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げるとともに、皆様にとって素晴らしい一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。



院長
伊東 学



「ドクターが薦める専門医」
に認定

認定資格

日本整形外科学会整形外科専門医
日本脊椎脊髄病学会脊椎脊髄外科専門医・指導医
日本整形外科学会脊椎脊髄病医 他

主な専門分野

脊椎脊髄外科	脊柱側弯症
脊柱変形	脊椎低侵襲手術
脊椎・脊髄外傷	

ベストポスター賞受賞！ 第79回国立病院総合医学会 in金沢

毎年開催されている国立病院総合医学会は、加賀100万石の城下町として知られる石川県金沢市で、2025年11月7日～8日の2日間にわたり開催されました。会場には、全国各地から約5,000名の国立病院関係者が参加しました。当院からも複数の職員が学会発表を行い、そのうち3名がベストポスター賞を受賞しました。ここでは、その発表内容の一部をご紹介します。



ACPの心理的侵襲性を低減する取り組み — 評価尺度を用いた実証研究 — (心理療法士 円山)

当院緩和ケアチームは ACP（アドバンス・ケア・プランニング）推進に取り組んでいます。ACPとは、将来の意思決定能力が低下した場合に備えて、これから受けたい医療やケアについて本人の希望や考えを家族や医療者と共有し、文書にまとめていくプロセスを指します。しかし、ACPでは終末期に関わる話題が中心となるため、患者さんが強い不安を感じたり、医療者側も心理的負担を覚えたりするケースが多いことが指摘されています。そこで当院緩和ケアチームでは、患者さんの心理的安全性を守りながら、「どう死を迎えるか」ではなく「これからをどう生きるか」に焦点を当てて話を進める独自のACPプログラムを作成しました。2023年11月から2025年春までにこのプログラムを用いてACPを行った患者15名を対象に評価尺度を用いて調査したところ、患者さんが心理的負担を感じることなく将来について話すことができるようになりました。実際に、対象となった方からは「話すことで考えるきっかけになり、気持ちがやわらいだ」「自分が何を大切にしたいのか整理できた」といった前向きな感想が寄せられています。今後は、緩和ケアチームだけでなく各病棟のスタッフもACPに取り組めるよう、実施方法の工夫を進めていくことが課題となっています。



EVTでのIVUS使用時における測誤差の検討 (臨床工学技士 徳佐)

当院の臨床工学室は、急性期から慢性期まで幅広い治療に携わっています。今回はその中でも、下肢の末梢動脈疾患に対する治療への取り組みについて発表を行いました。この疾患の治療で使用される 血管内超音波 (IVUS) は、超音波の原理を利用して血管内部から構造を確認できる機器で、血管の太さや動脈硬化による内膜の状態を詳細に把握できます。治療の質を左右する重要な機器であり、下肢の末梢動脈疾患の治療において非常に有用です。当院では、このIVUSを患者さんに対して一定の水準で提供することを目的に、今回の取り組みを発表しました。学会発表で得られた学びを、今後の診療や検査の質の向上に活かし、地域の皆さんに安心して医療を受けていただけけるよう努めてまいります。

専門医が伝える「5大がん検診」

～市民向けがん公開講座を開催～ (がん相談支援室 副看護師長 松井)

2025年12月14日（日）、当院にて市民向け公開講座「専門医が伝えたい 5大がん検診」を開催しました。我が国では、がんが主要な死亡原因であるにもかかわらず、欧米と比較してがん検診の受診率が低く、特に北海道は死亡率・受診率ともに全国ワーストレベルとなっています。こうした状況を踏まえ、がん予防と早期発見の重要性を広く知っていただくことを目的に本講座を企画しました。

当日は、当院の専門医4名が登壇し、国が推奨する5つのがん（子宮頸がん、胃がん、大腸がん、乳がん、肺がん）について、それぞれの特徴や検診方法、受診のポイントをわかりやすく解説しました。講演後の質疑応答では、「検診は何歳まで受けるべきか」「男性でも乳がんになるのか」「検便で異常がなければ大腸がんの心配はないのか」など、多くの質問が寄せられ、参加者の高い関心がうかがえました。

また、会場外には展示ブースを設置し、がん検診・がん予防に関するポスター展示やパンフレットを配布しました。多くの来場者が足を止め、熱心に資料をご覧になる姿が見られました。講演後のアンケートでは、「説明がとてもわかりやすく、周囲にも検診の重要性を伝えたい」「毎年検診を受けているが、これからも続けたい」などの声が寄せられました。また、「資料展示が充実していて情報収集に役立った」「HPVワクチンについて学べたので、家族に伝えたい」など、学びが行動につながる前向きな感想も多くいただきました。当院では今後も、市民の皆さまの健康意識向上とがん検診受診率の向上に向け、啓発活動に取り組んでまいります。



令和7年度院内暴力対策訓練を終えて

(医療安全管理室 係長 樋口)

2025年10月29日（水）、当院では患者さんやご家族、そして職員が安心して過ごせる医療環境を守るため、札幌方面西警察署の警察官をお招きし、院内暴力対策訓練を実施しました。この訓練は、医療現場で起こりうるさまざまな状況を想定し、万が一の際にも落ち着いて適切に対応できるようにすることを目的として、昨年度から年1回行っているものです。当日は、医師、看護師、コメディカル、事務職員など、各部門から計68名が参加しました。

訓練に先立ち、警察官より最近の犯罪発生状況やその傾向について講演が行われました。続いて、受付など日常業務を想定した初期対応訓練と、護身術の実技訓練を実施しました。初期対応訓練では、相手への声かけの工夫や職員同士の連携方法、情報を素早く共有する重要性について確認し、チームで行動する大切さを改めて学びました。今回の訓練を通して、日頃からの備えが患者さんの安心だけでなく、職員自身の安全にもつながることを再認識しました。今後も継続的に訓練を実施し、地域の皆さまから信頼される、安全で質の高い医療の提供に努めてまいります。

